

The Interview

タケカワ
ユキヒデさん

『ガンダーラ』『銀河鉄道999』『ビューティフルネーム』などのヒット曲でおなじみのタケカワユキヒデさん。現在はソロ活動を中心に作曲家、音楽プロデューサー等として幅広く活躍中ですが、私生活では一男四女の大家族を支える、音楽業界きっての家族思いの父親として、また夫として知られています。そんなタケカワさんに「男女共生のまちづくり」についてお話をうかがいました。

男女共生への第一歩は、家族から そして地域から始めよう。

家族は人間が生活を営む最小単位の社会。夫と妻、そして一男四女の7人家族のタケカワ家では、どんな共生社会を営んでいくのでしょうか。

これだけ家族が多いと、たとえば洗濯物もすこいんでね。妻は必死になって一日中洗濯機を回しているんですけど、そんな妻をみる

たびに「僕は家政婦さんと結婚したつもりはない」といいたいですね。ですから我が家では、僕をはじめ、息子や娘も自分の身の回りの管理は自分ですることを基本としています。だって明日必要な物があるなら、各自が自分で洗濯して用意すればいいわけですから。洗濯機が使える年齢になってそこまで心

配してやる必要はないと思うのです。

では、なんでも単に女と男で分担してやればいいのかというと、それでは義務感ばかりが先にたってしまうって、本当の男女共生とは言えないと思います。お互い得意なことで協力しあうほうが自然ではないでしょうか。ちなみに、僕は食器の後片付けなら手早くできるし、食後のお茶を入れるのも好きなので、率先して楽しくやっています。

子育てのパートナーシップはどうですか。最近では、父親ももっと子育てに参加するように言われていますが、5人のお子さんとは、どう関わってこられたのでしょうか。

よく赤ん坊をお風呂に入れることが父親の役目と言うけれど、子育てに参加するという意味では、おむつを換えたり、子どもを寝かしつけたり、離乳食をつくったり、男性にだってもっとやれることがたくさんあるはずですよ。我が家は、妻の実家が同じ敷地内にあったので子育ての手は足りていたから、僕の一番はあまりなかったけど、それでも毎夜、赤ん坊をねんねでおんぶして寝かしつけていましたし、大きくなってから「さあ、ねるぞう」と子ども5人を引き連れて布団に突入していましたね。

子どもたちとは、幼いうちから一人の人間

「男女共生のまちづくり」へのメッセージ

女の人も男の人も、自分の個性で輝ける、そんな「男女共生のまち」っていいですね。



創刊にあたって

さいたま市長
相川宗一



さいたま市では、「21世紀をリードするみどりの広域交流・生活文化都市」を将来像とし、都市・市民生活の両面から諸施策を進めておりますが、中でも、男女共同参画社会の実現は、重要課題のひとつと考えております。

このたび創刊となりました情報誌「You & Me~夢~」は、男女共同参画の視点に立ち、さまざまな情報や市民の皆様の声を通して、女と男がお互いに支えあい、喜びも責任も分かち合える社会をつくるために共に考えていく啓発誌として作成いたしました。

市民の皆様を活発な参画とご協力をお願いいたします。

としてちゃんと向き合って話すことを大事にしてきました。僕自身、子どものとき、大人がきちんとこたえてくれなかったことがとてもイヤだったんですね。でも、子どもでも大人が本音で話す理解できることがたくさんあるんです。よく忙しくて子どもと話す時間がないので、子どものことはよくわからぬという父親がいるけど、それはちょっと違うんじゃないかなあ。問題は時間ではなくて、学校の成績やしつけなど外面的評価ばかりを見て、内面的なことをきちんと受け止めようと思わないからだと思いますね。

女の人も男の人も、いきいきと生きられることではないでしょうか。たとえば日本には、女性が母親になると、相変わらずその子どものお母さんでいることが一番大切な仕事とされる風潮がまだにあるんです。その結果、母親が外で仕事をする、母親をいい加減にやっていると解釈される傾向にある。だからお母さんになると仕事を辞めてしまう人が多い。これはとても残念なことだと思いませんか。なかでも問題なのは、母親であることを強要されて、才能や技術も経験も封印してしまった女性たちです。ぜひ、社会に出て、自分らしく輝いてほしいですね。社会と関われる場はいろいろあるわけで、それがたとえば地域のボランティアやPTA活動でもいいと思うのです。

一人ひとりが輝くためには、これまでの社会通念や慣習を変えていく必要があると思っておりますが、たとえば、どんなことを見直していったらいいとお考えですか。

これまで縛られていた古い慣習を取り払って、「二人ひとり人間らしく生きようよ」というところからはじめていきたいですね。

たとえば、PTAや地域活動のあり方そのものを見直してみてもどうでしょうか。これは長男が小学校に入ったときに感じたことです。保護者会ではどの親もひとくりにして、みな一様に「お父さん」「お母さん」として扱われることが多かったんですね。そうすると、僕の人格も認めてもらえていないような気がして、なにか役に立つことをしたくてもできなかった。ところが、下の2人の娘が通う学校では、入学したとたん、タケカワさ

んは音楽が得意とお聞きしたので、ぜひミュージカルのお手伝いをしていただきたいと申し入れがあったですね。これなら僕もはりきって参加できると思っただけです。

つまり、私たちの地域にはミュージシャンのお父さんがいる。魚屋のお父さんも、弁護士のお父さんも、コックのお父さんも、エンジニアのお父さんもいる。多様な個性をもった人たちが暮らしているわけです。この宝の山を見過ごす手はないと思うのです。地域にいろんな個性が発揮できる場をどんどんつくっていく。私たちもお母さんやお父さん、あるいは地域のおじさん、おばさんとしてではなく、個性ある一人の住民として積極的にかかわっていく。そんな地域のあり方が、これからの男女共生のまちづくりへの大きな一歩となっていくのではないのでしょうか。



プロフィール◆1952年さいたま市生まれ。東京外国語大学卒業。「ガンダーラ」「銀河鉄道999」「ビューティフルネーム」等のヒット曲で一世を風靡、そのゴダイゴでは作曲とボーカルを担当。現在は作曲家、歌手、音楽プロデューサー、ライブなどの音楽活動のほか、小説、エッセイなどの執筆活動も行う。一男四女の子煩悩な父親としても知られ、'99年度のベストファーザー賞を受賞。この12月には自らの子育ての経験をふりかえり書き上げた『娘のいる父親のための本』（集英社）が出版される。

男女が共に支えあうからこそ、それぞれの個性が発揮できるのだと思う。